

野田英夫 《都会》

野田英夫(1908-1939)
《都会》

1934年
油彩・キャンパス
44.5×90.9cm
平成28年度購入



野

田英夫はカリフォルニアに日系二世として生まれ、日米を往復しながら市井の人々の姿を描き、そしてわずか三十歳で夭折した画家です。彼の代表作が、新たに当館コレクションに加わりました。

まず目を引くのは、画面の左右にひときわ大きく描かれた男女でしょう。左の若い女性は、半ば崩れかけたレンガの壁に囲まれるような空間で幼子を抱き、乳を与えています。右の逞しい男性は工事現場で身をかがめて、ワイヤー（またはホース）を、マンホールの中の別の男へと手渡ししています。そしてこの男女の間には、アメリカの都会風景が広がっています。とはいえ、どこか具体的な場所を描いたものではないようです。画面の中央上部には、ワシントンの議事堂を思わせるドーム状の建物がありますが、実際の議事堂とは異なり、それを圧するように周りを雑居ビルが取り囲んでいるのです。建物の並びも整然としていません。モンタージュの技法によって個々の建物を自由に組み合わせさせて描いたものと考えられます。こうした構成法は壁画でよく用いられました。実際に野田はこの作品を描いた頃、ニューヨークでディエゴ・リベラの助手として壁画制作に携わっていました。

野田はどのような意図でこの空想の街を組み立てていったのでしょうか。街の情景

を観察すると、目立つのは中央手前、建物と建物との間にロープを渡して干された、色とりどりの洗濯物です。その下には多くの人々がひしめきあっていて、都会の中でもかなり庶民的な界限のようです。こうして見ていくと、画面の左右の男女というのは、中央に広がる庶民の暮らしの中から、任意に取り出され、拡大されたもののようにも思えてきます。もちろん、右側の働く男性を父親と考え、左にいるのはその婦りを待つ母子だと考えることもできるでしょう。ただしそう考えた場合、男性の顔が見えないのが気になります。これではこの男に私たちは感情移入できません。むしろその下の、マンホールの中の男のほうが、手を上に突き出し、意志的なまなざしを上に向けているのです。このように、この作品は細部に目を凝らせば凝らすほど、単純な解釈では収まりきらない要素が見えてきます。絵を見る私たちは、それらの断片的なシーンを手がかりに、さまざまな物語を紡ぎだしていくことを促されるのです。そういえば画面の左右には、この街を取り囲むように、削れた岩肌のようなものが描かれています。この岩肌を、いわば劇場の緞帳と見立てて、私たちは、ある囲われた物語世界へと、意識を向けていくことになるのです。あなたなら、どんな物語を想像するでしょうか。

（美術課長 大谷省吾）